

平成 16 年第 3 回定例会「決算等審査特別委員会」公営企業会計中、病院事業会計決算で質問

17, 2004 23:00

○嶋中貴志委員　私の方からは、病院事業に関しまして決算の附属書類の中に病院事業報告書、その 1 として概況とありまして、その中の「新規の主要事業としては」云々というところがございます、その最後のところに「医療スタッフ間の迅速なコミュニケーションによる医療の安全と質の向上を図るため、電話交換機設備の更新に併せて院内 PHS を導入しました」と、このようになっておるわけですが、この事業の内容について、概要で結構ですのでお示しいただければと思います。

○市立病院経理課長　電話交換設備更新の内容についてでございますが、電話交換機の設置から 11 年を経過いたしまして耐用年数をオーバーするとともに、経年劣化が相当進みました。また、故障時の部品調達も厳しくなってきましたことから、電話交換機の更新を行うとともに、あわせて新たな機能を活用し、PHS の導入、それから PHS とナースコールとの連動をあわせて行ったものでございます。

○嶋中貴志委員　今、PHS とナースコールとの連携を図るということでございますけれども、最初の院内 PHS、院内ピッチというんですか、これはどのような内容なのか。具体で教えていただければお願いします。

○市立病院経理課長　これまでにつきましては、院内での医療スタッフ間の連絡を院内ポケベルで行ってございましたけれども、電話交換機の更新の際に医療スタッフ間の迅速な連絡が行えるように PHS の使用が可能な機種を選定したものでございます。あわせて、PHS とナースコールを連動させることによりまして、患者さんへの素早い対応を可能とし、患者さんへの適切な対応、それから医療の安全確保と質の向上をねらいとしたものでございます。なお、PHS の端末につきましては、人体や医療機器への影響がないことを確認の上、使用しております。

○嶋中貴志委員　今、御答弁の中でナースコールとピッチの連動といいますけれども、素人なものでよくわからないので、具体的に教えていただければと思います。

○市立病院経理課長　ナースコールとピッチの連動についてでございます。入院患者さんからナースコールがあった場合、ナースステーションの親機と看護師が携帯中の PHS の双方を呼び出しますので、どちらも通話可能となります。また、PHS には呼ばれた部屋番号とベッド番号が表示されますので、直接その部屋の患者さんに駆けつけることができます。さらには、看護師間の応援が必要な場合、PHS から PHS に直接連絡し、迅速に応援要請が可能となっております。

○嶋中貴志委員　それでは、従来使っていたポケベル、これは使っていないとか、捨ててしまったとか、どうしているのか、その辺どうでしょうか。

○医事課長　従来医師や医療従事者や使用しておりましたポケットベルを再利用しまして、平成１６年２月より外来患者さんへの貸し出しを開始いたしました。現在、院内に１５０個配置しておりまして、外来各診療科、各検査室に５個から１０個配置しております。呼び出し可能な範囲は病院の敷地内となっております。順番が近づいたときにポケットベルの振動によりお知らせしております。

○嶋中貴志委員　ポケットベルは音が出ない、振動ということでしょうけれども、それは例えばバックの中に入れたりしたらわからないのではないですか。どうでしょうか。

○医事課長　一応ポケットベルにつきましては、黄色いストラップ、我々がつけているような感じのこの黄色のがあるんですが、これをつけて首にかけて使用するようお願いしておりますが、それ以外の使用の場合がたまたま見受けられますので、そういう場合は振動が伝わらないことがありますので、使用についての説明をなお一層十分に行うように努めてまいりたいと思います。

○嶋中貴志委員　高齢者の方とか、首からぶら下げていて鳴っていても多分わからないのではないかなと思うんですけれども。そういうことも踏まえまして、システムとしてすばらしくても、その運用に関していかなければなかなかうまく機能しないという点があるかと思うんです。また、病院内では例えば科をまたがってやる方なんかもあると思うんですけれども、その際の連携とか、内線なんかあるとは思いますが、その際も例えばシステムがすぐれていても、そこできちっと内容が伝わっていなければこれは意味をなさないわけですので、その辺は十二分に御注意していただいてこれからも進めていただきたいと思います。導入されて時間がたっておりますが、具体的にその導入効果についてお聞きします。

○医事課長　導入に当たりまして、ポケットベルの利用者に対してアンケートを実施いたしましたところ、大部分の方にはよい評価をいただきました。具体例を挙げますと、待ち時間の間トイレ、売店へ心配なく行くことができるなどでした。また、聴覚障害者の患者さんからもバイブレーションによる呼び出しであることから好評をいただきました。

○嶋中貴志委員　先ほども横田委員の方からありましたが、市立病院は建てかえがおおむね１０年後

ということでございますけれども、10年後にはそうするんだから適当にやっておけということではなくて、その間も患者さん本位の事業を私は大いに展開してもらいたいと思っておりますけれども、御所見をお伺いします。

○市立病院総務部長　建てかえまでの間における患者さん本位の事業ということでございますが、当院の施設、設備の改修といったものにつきましては、これまでも年次計画、患者さんの安全・安心あるいはサービスの向上といったところを十分に配しながら計画的に行ってまいっております。今後、建てかえの方向が示されておるわけでございますけれども、その間におきましても日々の患者さんの診療あるいは療養状のお世話というのを毎日24時間我々続けていかなければなりませんので、患者さんの安心・安全あるいはサービスの向上といったことについては十分意を尽くしながらやってまいりたいと思っております。

○嶋中貴志委員　意を尽くして頑張っていただきたいと思います。

そこで、先ほども申しましたが、私は患者さん本位というのが極めて大事な視点と思っておりますけれども、最近新しい流れとしてセカンドオピニオンというのがございます。これはなかなか聞きなれない言葉でありますけれども、いわゆる主治医などの1人の医師以外の他の医師に診断や治療法などについて意見を求めるということになっておるんですが、特に選択肢が複数ある、例えばがんの治療とか、ほかに大手術を伴う疾患などの場合、主治医以外の専門医のアドバイスを聞くことで納得して最適な治療を受けたいという患者さんや家族が最近ふえておるようでございます。どうしても私たちは主治医などに遠慮して、他の医師の意見を求めるということには気兼ねする風潮があります。そういう反面、先ほど申しましたセカンドオピニオンに対するニーズというのは高まってきていると。現に公立病院でも国内で大阪府、神奈川県等導入しているところがあるようでございます。

そこで、本市、私たちの市立病院の方では制度自体というのは導入していないと思っておりますけれども、いわゆるそういう考えに基づく取り組みなんていうのがあるのかどうか。その辺をお聞きしたいと思います。

○院長　セカンドオピニオンについてのお尋ねでございますが、患者さん中心の医療という当院の経営理念のもと、患者さんは医師や病院を選ぶことができること、さらに別の医師の意見を聞くことができることをパンフレットなどに明記し、患者さんに説明を行っております。患者さんのお求めに応じてのほか、当院の主治医が必要と判断した場合にも他の医療機関の専門医を紹介しまして、セカンドオピニオンを求めていただくなどの対応は行っております。また、逆に、他の医療機関で治療を受けている患者さんが当院の医師にセカンドオピニオンを求めてくる場合には、専門的な立場から意見を申し上げるといった対応も行っているところでございます。

○嶋中貴志委員　多分個別の対応になっているのではないかなと思うんですけど、今の取り組みで十分と考えていらっしゃるのかどうかお伺いします。

○院長　セカンドオピニオンを求める患者さんの数が増加していることは十分に認識しております。そうしたニーズの高まりにどのように対応していくか、検討してまいりたいと考えております。

○嶋中貴志委員　それでは、今取り組みをそういうふうにしていらっしゃるということですが、具体的にセカンドオピニオンというものの制度としての導入についてはどう思っているかお聞きます。

○院長　今後、そうしたセカンドオピニオンに関するニーズがさらに高まることは予想されますので、広くセカンドオピニオンに関する市民の御要望におこたえするためには、御相談の内容・程度にもよりますが、多様な領域で高度な専門医の確保をどうするか、また十分な診療情報を収集するためには他の医療機関の理解と協力がぜひとも必要でございます。このようなことなど幾つかの条件があると思います。そのような条件がございますけれども、市立病院としてどのような取り組みが可能なのか、他都市の先行例なども参考にしながら今後検討してまいりたいと考えております。

○嶋中貴志委員　それでは、最後になりますけれども、今御答弁にもありましたとおり、ニーズが高まっていくという御認識があるわけですが、おおむね10年後の新しい病院ができるときはもちろんですが、私としましては現にそういう取り組みを行っているのであれば、きちっとした制度として導入するべきではないかなと思うわけですが、御所見をお伺いします。

○病院事業管理者　委員からセカンドオピニオンについてどういうものかということの御説明が一番最初にございましたけれども、まずその前にファーストオピニオン、要するに主治医の意見をよく聞くということがございます。そこで、ただやはり主治医以外の医師の意見を聞く、そして患者さんが納得をされて治療法を自己決定すると、これがセカンドオピニオンの一番大事な点であるし、そして患者さんと主治医がよりよい信頼関係をつくっていくということが目的になっているかと思います。そういう中で、市民の医療に対する意識も高まっておりまして、セカンドオピニオンを求める患者さんはどんどん今増加しているという状況がございます。そうしたニーズに対応することは当然のこととございまして、新病院の構想づくりの中でもこの導入について十分に検討してまいりたいと考えております。